

クライミングの質的変容と今後の課題について

菊 地 敏 之（(一社) アルパインクライミング推進協議会会長）

私は1977年に社会人山岳会に入ってアルパインクライミングを始めた。ちょうど日本のアルパインクライミングが最活性期を迎え、各山岳会にはメンバーが充実して岩場のルートもまさに旬といった頃だ。ただ私自身はそれ以前にもこの時点ですでに長らく鷹取山でボルダリング（当時この言葉はなかったが）をしてきていたし、さらに80年には例のバーカーショック、戸田直樹氏らによる「フリークライミング」というスタイルのアピールを、もろに受けることにもなった。そういった意味ではこの頃のアルパインとフリーとの相克、ある意味せめぎあいの煽りを、もろにくらってきた世代でもある。

実際、当時のこの両者の火花の散らし合いは、雑誌などではさほど露わには見えなかったものの、現場ではかなりなものだった。アルパインクライマーはフリークライミングを「ゲレンデクライミング」といって低いものに見ていたし、（新生）フリークライマーはアルパインクライミングを十年一日のIV級A1クライミングと揶揄していた。記録としてはコップ状岩壁や二ノ沢右壁のフリー化などといった、両者を跨ぐような意欲的なものもあるにはあったが、それはあくまで特殊な人の特殊な記録であって、そうしたスタイルを皆がどのルートにでも取り入れるという意識は、一般クライマーにはまだまだ少なかったように思う。実際、私自身も穂高のあるルートで人工ピッチとなっていたハングをフリーで越え、それを山岳会の例会で報告したところ、「そんな危ないことをするな。落ちて怪我などしたらどうするんだ」と、お叱りを受けたことがあった。一方でフリーク

ライマーたちはそのような「怪我などする」ようなルートに行くことは無駄と考え、その対象をひたすら限定し縮めつつあった。つまりこの二者は、お互いにお互いを違うジャンルの行為と捉え、いずれも自分たちの殻によりいっそう籠るようになる、というのが、この頃のクライミングの実情だったように思う。

そうした中で私はクライミングにどっぷりと身を浸すようになっていったわけなのだが、その立ち位置はなかなか難しいものだった。アルパインクライミングを目指していながらフリークライミングの影響もすでに強く受けている、という立場にいたからで、当然ながらその目標も右往左往することになった。これは見方によっては両方のいいところ取りができるようにも思えるが、逆に両方ともどっちつかず、ということにもなる。特にこの頃の私は双方に対する疑問ばかりが目につき、それがいっそう、自分のクライミングを中途半端にしていたような気もする。

その疑問とは、まずアルパインクライミングに関して言えば、やはりなんといってもルートの極端な人工化ということだ。これにはいくつかの要素があり、その中でも第一に挙げられるのは、支点の過剰な打ち足し、いうまでもなくハーケン、ボルトの乱打だ。これは今でも国内の人気ルートを登れば嫌でも目に付くことと思うが、その様相はまったくすさまじい。これで充分と思えるようなハーケンが1枚あるのに、そのまわり、ときに同じリスにもそれが何枚も打たれ、ボルトなどそれこそ所構わず打たれまくっている。またボルトラダーというのも大いに

気になるもので、それがまた実にあちこちにある。当然どこを登っても同じようなもので、まったく面白くない。これがいったい「クライミング」なのかとすら思ってしまう。さらにはこの頃のルートというのはライン採りも意味不明なものが多く、その作爲的な感覚についていけない。あっちが見るからに簡単そうなのに、なんでこっちに行かなきゃいけないんだ、とか、逆にここまでこうして攻撃的に来たのに、なんでここでこっちに行っちゃうんだ？

などといったことだ。実を言えば私はこの頃、ルートファインディングが下手だとよく言われたのだが、それもこうしたことを踏まえれば多少は許してもらいたい気もする。

そしてそうしたアルパインクライミン

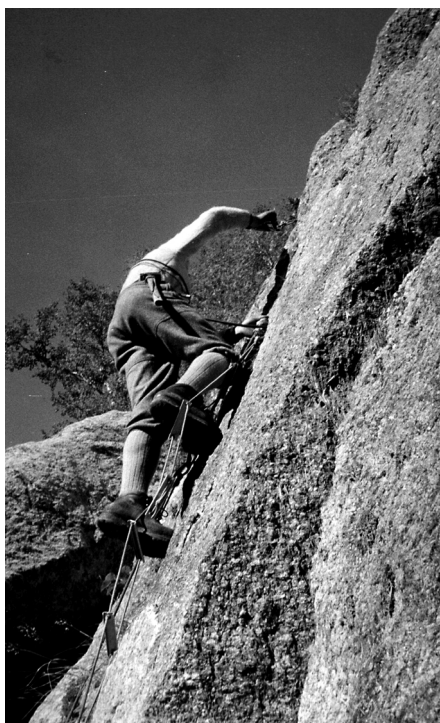


写真1 70年代の代表的なクライミングスタイル、ボルトラダークライミング

グで結局一番強く感じ、不満に思っていたのは、やはり難度的にまったく頭打ちだったということだ。前述したようにこの頃のアルパインルートは日本全国総Ⅳ級A1で、ちょっとでも難しい箇所には人工登攀用の支点が必ず現れる。結果、難度的にはどこもほとんど変わらない。それが鷹取山で長くボルダリングをしていた身にしてみれば、なんともつまらない。もちろん上に述べたような「フリー化」という動きもこの頃盛んではあったのだが、個人的にはこ

れも前述した通りの「狭いフリーエリア」にむしろ魅力を感じるようになってしまっていて、いまひとつそうしたものに乗り切れない。

と、結局言い訳ばかりになってしまうようだが、そのようなことから私は徐々にアルパインクライミングに興味を失い、フリークライミングへと傾倒していくようになった。それはおそらくこの頃のクライマーは皆同じだったのではないだろうか。実際その頃、若い才能はほとんどすべてこちらに流れてしまっていて、アルパインはフリーができない人がやるもの、というイメージが固定化していたように思う。

というわけでそうしたある意味象徴的な70年代アルパインクライミングが終焉を迎えた（ように見えた）1982年、私はヨセミテへと出かけたのだが、そこで今度はフリークライミングにも疑問を抱くことになった。という言い方は正しくない。正しくは、自分たちのフリークライミングのやり方に、疑問を抱く、というより、もっと正直に言えば劣ったものを感じるようになった、ということだ。

というのは、やはり彼の地のクライマーたちのレベルの高さ。といっても単に登るグレードが高い低いということではない。そのスタイルがあまりにも違いすぎるということだ。この頃の我々の登り方というのは、なにしろ高グレード（といってもタカが知れていたが）。分不相応なルートに取り付き、丸1日かけて波状攻撃を繰り返しながらたった1本をなんとか登る。それでも登れてしまえば自分はこのルートを「登れた」と思い込み、次はさらに難しいルートへと向かう。というのが通常だった。

しかし向こうのクライマーはあまりそういうことをしない。というか、そんな同じルートを1日中やっているなどというクライマーはその頃ほとんど見たことがない。パッと来てはパッと登って帰っていくか、なかにはフリーソロをしたり、プロテクション

2. 登山界の現状と課題

数個で一瞬で駆け登っていく者すらいる。

そしてそうした実力の違いをまざまざと感じたのは、やはり彼の地の巨大岩壁。そこに引かれた高難度のロングフリールートと、それを登るクライマーたちの存在を知ったことだ。それはいずれも日本のアルパインルート何倍もあるような規模のものばかりで、しかもその難度はやはり当時の日本の（フリーの）レベルの遥か上をいっている。それを、向こうのクライマーたちは普通に登っているのだが、それを自分たちができるかという、それは普段の有様を見ても話にならないことは明らかだった。向こうの「本場の」クライミングを知れば知るほど、いかに自分たちが勘違いもほどほどしいか、思い知らされるばかりだったのだ。

それを日本に帰ってから思い直して正しい形にする、というなら話は立派なのだが、残念ながら私はその直後に大怪我をしてクライミングから完全に離れることになってしまった。数年後、意外に早く復帰はできたものの、もとのレベルに戻るのは難しく、なんとかクライミングの片端にしがみついているのがやっと、という感じだった。

個人的な話ばかりになってしまっただけで申し訳ないが、その間、日本のクライミングは当然ながら相応の変化を遂げつつあった。一番の変化はなんといってもフリークライミングの急激な膨張とレベルアップで、それはここで説明するまでもないだろう。しかし一方のアルパインクライミングは残念ながらあまり活気があるように見えなかった。というより、むしろ明らかに萎みつつあった。結果内容もレベルも昔とまったく変わらず、稀に記録を出すのはだいたい同じ顔ばかり。ボンボリーズという言葉が流行り、それはアブミやスリングをガチャガチャとぶら下げ、例のIV級A1にどっぴりと沈み切っている人たちを指す。いささか失礼な見方ではあるが、この頃のアル

パインクライミングといえばそれがしかし実情だったような気がする。

ただ、そうした中でも90年代に入った頃からは良い変化も見られるようになった。などという評論家みたいな言い方でこれも恐縮だが、アメリカンエイドというスタイルと、新たな次元でのフリー化が山の壁でも始まっていたことだ。

このうちアメリカンエイドというのはここで説明するまでもなく、ボルトを使わずハーケンやフックなど岩の形状に即したギアに頼って登る人工登攀スタイルのこと。私自身は人工登攀ということであまり興味は持てなかったのだが、これによって、ボルトレス、岩の形状を活かしたライン採りというルート本来の考え方が日本のアルパインクライミング界にも広まったことは、非常に大きな成果だったと思う。

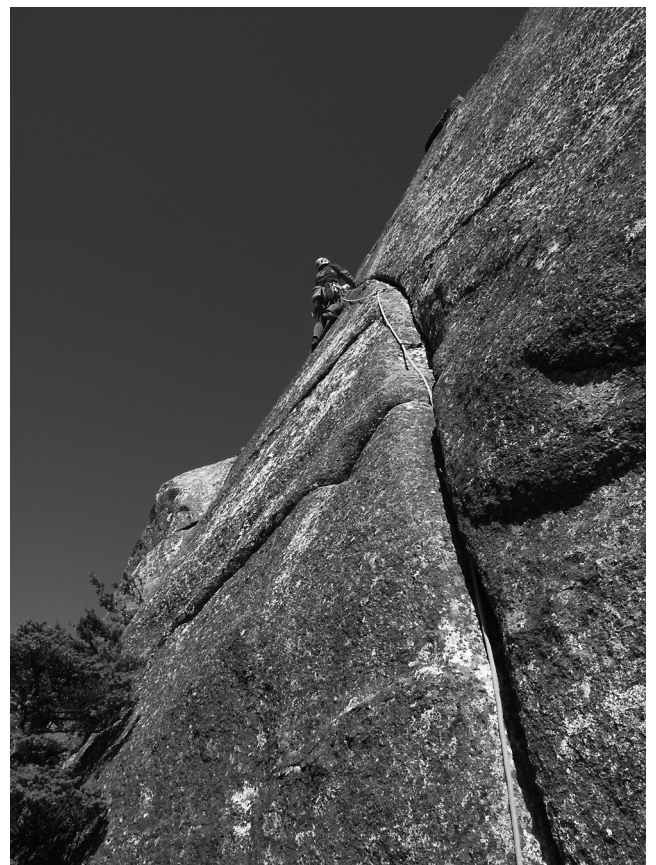


写真2 岩の弱点＝クラックにラインを求め、支点も自分でセットしながら登る今のクライミング

また新次元のフリーというのも大きな進歩で、これは記録としては屏風岩や甲斐駒Aフランケなどに優れたものが印されていた。なかでも衝撃的だったのは草野俊達氏による屏風岩「フリークライミング」ルートだ。これは屏風岩の東壁ルンゼルートに沿ってオールナチュラルプロテクション、オールフリーを実現したもので、まさにクライミングの理想の形といえた。

ただ、こうした動きがこの一般にも広く行き渡るまでには、まだ多少の時間が必要だったように思う。というのも、上の2つの記録が成されたのは1996年。この少し前くらいから私は瑞牆山によく通うようになっていたのだが、その頃ここですらマルチピッチのフリールートというものを登るクライマーはほとんどいなかったからだ。ベルジュエールでさえまだ何登という時代で、大面やカンマンボロンな

どのロングフリールートは初登以後ほとんど登られたという話は聞かなかった。そんなだからそれこそ山の壁の高難度フリールートなどリピートされることはほぼなく、アルパインの世界は結局どんどん萎んでいった。ように思えた。またその頃から私はガイドを始め、剣穂高谷川岳などのクラシックルートもよく訪れていたのだが（そしてこれはそうしたガイドの影響も大きいのかもしれないが）、そこで登られているのは本当に特定の人気ルートだけで、それ以外にはクライマーの姿はほぼない。それが90年代～2000年代初頭頃の、アルパインエリアの実情だったように思う。

結局またまた愚痴になってしまったようだが、だからその後しばらくして目にするようになった新しいクライミングの様相には、正直びっくりした。しかもそれがいきなり広まっていたことにも驚いた。という新しい様相とは、カムなどのナチュラルプロテクションを積極的に駆使した登り方と、夏の既成ルートにこだわらない、冬ならではのナチュラルなラインを登るという考え方のことだ。それを最初に耳にしたのは「ウィンター・クライマーズ・ミーティング」なる催しを聞いた時で、そこでは多くのクライマーがそういうスタイルを、あたりまえのこのように実践したという。

我々の時代の冬期登攀といえば、有体に言えば夏の既成ルートの支点を見つけてそこに辿り着くのが主な仕事で、少しでも悪ければボルトの打ち足しも厭わない。それで夏の（例の意味不明のラインの）ルートから少しでも外れれば、それではそのルートを登ったことにならない、などという言葉も聞かれたような状況だった。それに比べたら、そういう〇〇ルート冬期初登という記録にこだわらない登り方というのは、実に健全なものに思えた。またナチュ

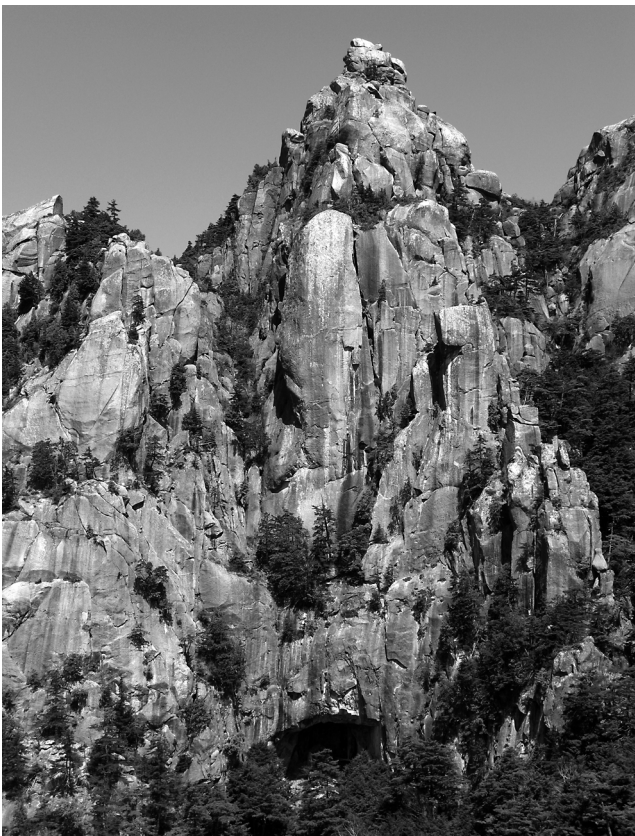


写真3 ナチュラルプロテクションで長い壁を登るという、世界に繋がるクライミングができる壁、瑞牆山の十一面岩。しかしここで得られるものにも限界はある

2. 登山界の現状と課題

ラルプロテクション云々に関しては、「残置無視」という言葉と考え方が、まず目から鱗だった。個人的にはヨセミテの壁などを登って、日本でハーケン、ボルトを追っかけるクライミングをしていても何の役にも立たない、そんな既成ルートをいくら登っても世界の壁では通用しないと痛感していただけに、こうした考え方はまったく素晴らしいと思った。

さらにフリーということでもレベルは大幅に進歩し、唐沢岳幕岩や黒部丸山、屏風岩、錫杖岳などでフリーの世界同様の高難度クライミングが多数記録されていた。これにも驚いた。いつの間にみんなこんなに上手くなってしまったんだろうと思った。

なにしろこうした二つの流れは2000年代後半くらいから急激に起こってきたものだと思うのだが（間違っていたら失礼）、その変化の度合いと広がり方は、個人的な感覚でいえば、ちょっと目を離していて気が付いたらこうなっていた、という感じに近かった。だがこれは、実に素晴らしい、そして羨ましい変化だった。というのも、我々の時代は先に述べた通り、アルパインとフリーが完全に分かれてしまっていて、自分たちにも必要であるはずのものを完全に棚上げにしまっていた。それが実情だったからだ。それがこのように「正しく」変わってきたのは、変な話になるかもしれないが、クライミングジムの影響が実は大きいような気がする。アルパインクライマーも日々ジムでフリークライミングに勤むようになり、それをやらないと山でも通用しない、ということがごく普通の考え方になっていたのだろう。そうしてアルパインクライマーもクライミングの基本の基本である「フリーの技術」というものを身に着けた結果、かつて閑古鳥の啼いていた瑞牆山などのマルチピッチルートにも多くの人が来るようになり、そのレベルも急激に進展していった。そして海外に目を向ければ、日本の少なからぬクライマー

が各地で驚くような成果をあげていた。これも国内のこうした傾向を見れば充分納得できるように思える。

前半と違い後半は今のクライマーをよいしょすることばかり書いてきたように思えるかもしれないが（今の人に勝ち目のない老人だから仕方ないとも見て欲しいが）、もちろん不満もないではない（これも、だから仕方ない）。

というのは、やはり全体的なイメージではアルパインクライミングが、前にも増して低迷してしまっているということだ。それは山に行けばまさに顕著だ。数年前から私は穂高、谷川などのアルパインルートに、ぼちぼちながらではあるが再び足を運ぶようになっていて、そこで見るルートの現状はほとんど無残ともいえるものだった。岩場は地球温暖化そ

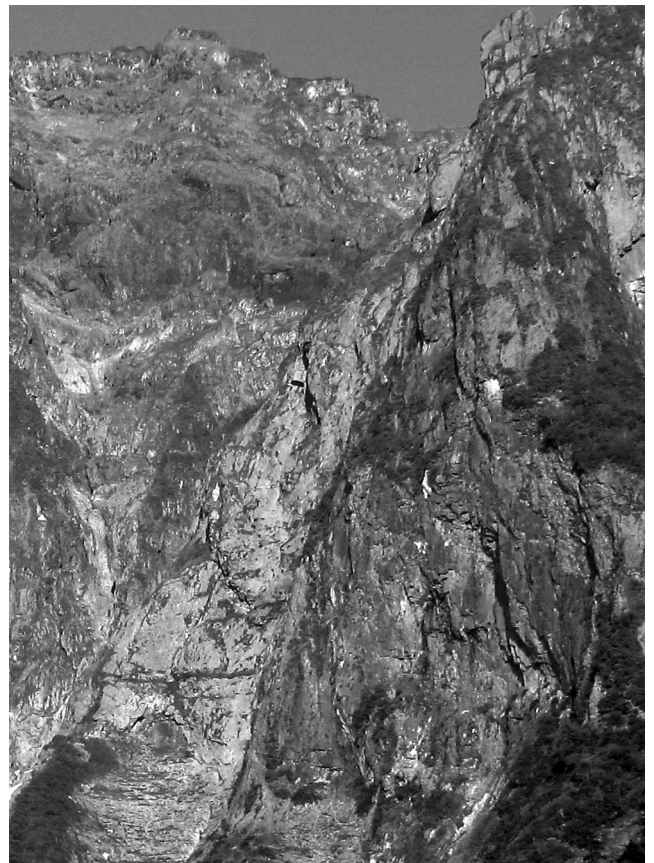


写真4 アルパインの象徴的な壁、衝立岩と烏帽子奥壁。しかし今ここで登られているルートはほんの僅かだ



写真5 幽ノ沢も今はあまり人がいない。中央壁などは完全に草に覆われてしまっている

のままに多量の草に埋もれ、アプローチルートも荒れに荒れている。クライマーは、かなり特定の人気ルートだけには列をなすほどいるものの、それ以外のルートにはまったく見ない。そしてそうした「それ以外の」ルートに取り付いてみると、支点は腐り、中にはピレイ点すら無いものもある。要するにほとんどが完全に「死んだ」状態になってしまっていたのである。

これでは今のアルパイン志向のクライマーにはモチベーションの湧きようがない。自分が何をすべきかが、わからない。実際、若いクライマーと話をしていても、入門ルートはなんとか登ったものの、その後がどうにも続かない、という人が多い。もちろん、しっかりした目標を持ち、それに向かってしっかりした実績を積み上げているクライマーもいるにはいるのだが、一般レベルのクライマーはこの部分でどうにも不足があるように思えて仕方なかったのだ。

もっとも、では我々が若い頃に「しっかり」していかたというと、これも少々自信がない。ただあの頃は、それでもまわりに流されて登っているだけで自然にそういう経験は積んでいくことができた。岩場のルートがすべて「生きて」いたからで、まずこ

こを登り、次にこういうルートを登り、というプログラムを組むことが容易だった。また穂高、谷川などの岩場に行けばそこにあるほとんどすべてのルートにまんべんなく人が取り付き、次から次へとそれを潰していくことができた。そうした中、我々は新人の頃から年に何十本という、いわゆる本番ルートを登り、一人前のクライマーを目指して行けた。そういう「密度」だけは確かにたいしたものだったといえる気がする。



写真6 あの滝谷第4尾根も、ほんの数年前ですら、いるのは我々だけだった

それを思うと、今の人たちは、この「密度」というものがどうにも足りているように見えない。確かに今はやることが多すぎて、毎週本番などに行っていられないということはあるだろう。フリーの技術をまず磨かなくてはならないし、ナチュラルプロテクション技術も身につけなければならない。小川山や瑞牆山にも行かなくてはならないし、冬は城ヶ崎

2. 登山界の現状と課題

も必須だ。それで山に行こうとしても、どうしてもその回数は減ってしまう。天気が少しでも悪そうなら、なおさらだ。その点我々の時代はやるべきことがたった一つ＝本番だけだったから、迷わず毎週山に向かうことができた。雨だろうと何だろうと壁に取り付き、あたりまえのように泥仕合することができた。だからそういう今の人にこんなことを言うのは気の毒ではあるのだが、こういう、いわゆる「山」の中に身を置くということの重要性は、やはり認識しなくてはならない。いくら必須とはいえ、ただ小川山、瑞牆山を登っていれば良いかというと、それだけではやはりアルパインクライマーとしては充分ではない。瑞牆山ばかりに通い、ここのクライミングをひたすら賛辞してきた私が言うのもなんだが、ここの壁をいくら登ったところで、世界の壁で通用するようなクライマーにはなれない。ここの延長線



写真7 ヨセミテのごく普通のマルチピッチルートも、日本のアルパインルートより規模はあるし、悪い箇所も頻繁に出てくる。技術とともに悪さへの耐性も当然必要だ 写真：増本亮

上であるヨセミテの壁ですら、登れるようにはならないだろう。

それは、やはり悪さへの耐性、予測していなかった事態への応用力というものが、このように整備された山では充分には養えないということだ。これらは私的にはアルパインクライミングで最も重要なものだとは思っているのだが、これはもう、ひたすら悪い壁を登ることでしか鍛えていけない。そして予期せぬことが次から次へと出てくるような体験を何度も重ねていないと強くならない。しかもこればかりは、絶対的に量がものをいう。

思えばアルパインクライミングとは十種競技のようなものだ。その中にはテクニック、知識などとともに、悪さへの耐性や、あきらめないしつこさなども含まれる。我々の時代は、前者のようなものは「小手先」といって棚上げにされることが多く、後者の「度胸」と「根性」ばかりが声高に優先されることが多かった。私はそうした風潮がうんと嫌いだったのだが、その点では今の人は意識が健全だ。テクニックをクライミングの当然のベースと捉え、それを高めるために日々努力している。それは間違いなし、素晴らしいことだ。

だが繰り返すが、それだけでは充分ではない。技術的なものではない、状況的な悪さというものにも充分な耐性を身につけなければならない。そのためには多くの泥仕合と、ときに失敗も繰り返しながら、上に述べたような「密度」を積み重ねていくしかない。そしてクライマーがそのような課題に密に向かうようになれば、岩場もおそらく生き返り、かつてのあの活気が戻ってくる。昔の悪しき風潮は捨て去った健全な形で、蘇ってくるように思うのである。